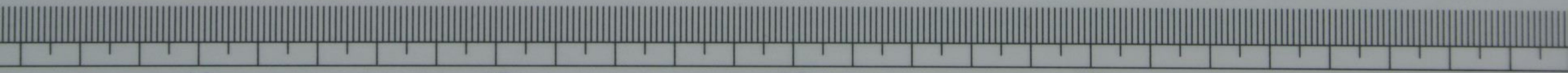


季寄  
 註解  
 改正月令博物笈  
 三春部  
 四

5  
 改  
 529  
 4



10

15

20

25

30







△柳	△芥	△三葉芹	△石蓴	△鶯	△雲雀
△薺菜	△獨活	△海苔類	△種子	△百子鳥	△雲雀
△液蔭菜	△雜菜摘	△鹿角草	△種子	△鶯	△雲雀
△嫁菜	△椿	△櫻	△種子	△鶯	△雲雀
△秦叔皮	△獨活	△櫻	△種子	△鶯	△雲雀
△山葵	△獨活	△櫻	△種子	△鶯	△雲雀
△三葉芹	△獨活	△櫻	△種子	△鶯	△雲雀
△海苔類	△獨活	△櫻	△種子	△鶯	△雲雀
△石蓴	△獨活	△櫻	△種子	△鶯	△雲雀
△鶯	△獨活	△櫻	△種子	△鶯	△雲雀
△百子鳥	△獨活	△櫻	△種子	△鶯	△雲雀
△雲雀	△獨活	△櫻	△種子	△鶯	△雲雀

### 春之部

△此印ある春  
三月より春

### 春時令

此部より春三月より  
なる季の物をのす

### 春風

東風の春吹風ののどろ  
みしてあつらるるものなり

春風の地下より吹上り地中の生理を発  
出し曠野青く是春の應なり○  
巳卯の風ゆけ其年大風あり  
五月西春は南小秋は北の風も  
東風こそ雨つるとまきとよめ  
哥の俗説としてとよめとよめ  
あり春は木より南は火から南  
風の時節の氣より相生とよ  
方の風は雨とよめ方角より時  
節の氣とよめ晴北の水春  
は木より水生木とよめんたり  
北風よけは晴なり尤西北の風と  
乾風とよめ四季より晴なり東  
北の風は常より雨にかりとよ



とも春の北風こそ晴るを以て  
東北の雨も雨よあはれ申酉の  
風とまどとの常は晴とほり  
どふとひとと春の南風こそ雨  
とるゆへ未申はまは羊頭と  
いつて雨よかるを

哥拾遺

躬恒

吹凡とふいふい梅乃花  
らうらうの雨そ香いままうけり

同 春風不処 後京極

おしあてはの春をもおむひさ  
君が代よいままうせそく

詞胡糸風 ちあち。まごり。

非春風や三保の松を清る 鹿貫

詩 春風 五字對句

煙花宜落日 春風開紫閣

絲管醉春風 大樂下朱樓

詩 春風七字對句

詩礎

只言啼鳥堪求侶 揺春風

無那春風欲送行 野外昏

春風夜動蘿衣薄 度春風

芳樹朝催玉管新 逐春風

霽日滿江寒漏靜 動陽春

春風遠閣白蘋生 待落梅

寒雨送行千里外 任好風

東風沉醉百花前 舞東風

春風詞

高遠

明月斷魂清靄々平蕪歸路



緑迢々 此二句春月 人生莫遣 此二句

頭如雪 縱得春風亦不消 年ヲ

頭雪ノ如クナルヤウニチキ用ハレ

春雲 風ノ同シ西風吹ル

又降晴とあり事風の方角と

同ト西南より東へ行と出雲と

り晴あり東北より西へ行と

入雲とあり雨なり或ひは東南

東北より雲と入るも雨西北

西南より雲と出ると晴西南

と云ふも南より未申のあつて

より雲出ると沖氣といふ雨なり

と云ふも雨なり

と云ふも雨なり

と云ふも雨なり

と云ふも雨なり

と云ふも雨なり

と云ふも雨なり

と云ふも雨なり

と云ふも雨なり

と云ふも雨なり

と云ふも雨なり

春天

△春の空のつゞきのどく

おちけけ霞をそく田子れ浦小

おちてとれい山の隅にさ

詞のつづきのどく

非 春の空のつづきのどく

詩 春天五字對句 同上

碧落三天外 山川乱雲日

黄圖四海中 樓閣入烟霄

雲断岳蓮臨大路 樂春天

天晴官柳暗長春 兼煙霞

山河香映春雲下 拂春雲

城關參差晚樹中 入洞天



春日 北山殿 為世

日影の令 物も如くぬきりけり  
美久百首 忠房

かゝ夜もちとあはれこそけり  
日のうしろしくとあまけるる

詞めらる。出る。天はくまに日影  
照る。めらる。のよけこそす。うらる。

くら。若の心影は影。影じやく  
連 千日にも女はくま春日の

非 びらうとておぬし梅さき  
子もけりやなふ雀の砂あひて

狂 見つけせは柳橋ふたふた  
候達こたえまてのふふ山教二

暹日 △秘日△暮かぬ△暮おそ  
△春の日おほに。右のふも  
も春の日いれかくくあつた日の心

新古今 費之  
我をまの山正ふあくかしく  
長く一日はくまもろじつ

六百番哥合 有家

夕暮のあけのけさの朝を  
と風原ぞたるふ地もすれ

万葉集

うしろふては春日の雲雀あり  
あろくあしも物いそく鳥

詞 夕暮。春はつて。夕星の花を  
ふの序。みくろけち。花乃霜

非 傘張のほむらふはあはれ重五  
狂 柳の糸あはれてまを

とこ小織あむ日れあさかな二橋

詩 暹日五字對句 同上

彩雲歌處 暹日 暹方照

暹日 舞前留 高齋 淡復空

詩 暹日七字對句 詩礎

桃源洞裏居人滿 淑景移



春一時令 糸遊 春月 春ノ四

桂林山中佳日長 近春遲

春風自信牙播動 對斜暉

遲日徐看錦纜牽 日光遲

糸遊 遊糸 春の日の如く時空と云

陽炎 野馬 日の如く埃の如く馬の走

哥 六百番 定家

春月 臆月 春の月の

新古今 大江千里

同 源具親

夫木 春山月 入道攝政

同 後九條内大臣

同 定家

同 家隆

風雅 河上春月 有無

夫木 為氏

同 霞隔月 宣房

同

同

同

同







風ふ月けつりも花の香とよぶ  
詞 春は山の煙霧は夜夏より

のつた雲のほろゆる。それら  
非 猶やひんかこを新やし

狂 人月まをうりこちの春はよ  
おろろ月夜ふ志くりのほは可由

春朝 新古今 藤原家隆  
庭の川木の松山乃

くくはふるむく横雲はそく  
詞 春の曙。おどろく。のどけさ  
の胡。ゆるさる。ゆるさる。ゆるさる

庭治。木の松山。空のむ。柳の五  
非 胡の月。梅の香も来て咲け

詩 春朝七字對句 詩 礎  
華堂翠幕春風至 曙光寒

緒閣金屏曙色開 送曉鶯  
春浮玉藻寒初落 月沫扱

露拂金莖曙欲分 入晨遊  
露拂金莖曙欲分 入晨遊

春眠不覺曉 處處聞啼鳥 春ハ  
多キユハ夜ノ明ルヲ知ラス鳥ノ夜  
啼クニフトオトロキ目サムルゾ

来風雨聲花落知多少 夕雨風  
来風雨聲花落知多少 夕雨風

春夕 春の夕ぐれといふや  
暮春とつる春の末ニ

詞 夕れ。暮る。暮る。暮る。暮る  
夕暮。夕日かを光る。暮る。暮る。暮る

連 梅の香は命の流る。あまの月夜 不知  
非 淋りかちくちくや春は暮る 五綾

狂 空の雲は夕暮る。夕暮る。夕暮る  
のひんかこをうりこちの春はよ

詩 春夕七字對句 詩 礎  
春夕七字對句 詩 礎

春夕 春の夕ぐれといふや  
暮春とつる春の末ニ

詞 夕れ。暮る。暮る。暮る。暮る  
夕暮。夕日かを光る。暮る。暮る。暮る

連 梅の香は命の流る。あまの月夜 不知  
非 淋りかちくちくや春は暮る 五綾

狂 空の雲は夕暮る。夕暮る。夕暮る  
のひんかこをうりこちの春はよ

詩 春夕七字對句 詩 礎  
春夕七字對句 詩 礎



春一晴令 春夕春望 青七

綠水殘霞催席散 隔暮雲

畫樓初月待人歸 夕陽遲

小苑迴廊春寂々 散餘暉

浴鳥歸鷺晚微々 目覺閑

春興 春野山を遊びて興あり

新古今 家隆

詞梅雪柳下枝 花の宿くせむべ乃夢

春望 春の暮き海川野山より

夫木 霧中眺望 有家

論 春の山川のうれふ詠をる

詩 春望七字對句 詩礎

白雲回望谷 城闕千門晚

青靄入看無 山河四望春

白蘋楚水三湘晚 樹中分

芳草秦城二月初 春色明

近郭亂山橫 古渡景物滋

野莊喬木帶新煙 接人烟

詩 曲江春望 唐 盧綸

菖蒲翻葉柳交枝 暗上蓮舟

鳥不知 曲江中ニアル江辺尤























五月ゆくかまのね山風み  
まのぞりらごうごうとせり

建保百首 海霞 全

なびく波もてゆふふとやそれ  
うとみふたけけすまの浦を

建曆哥合 山家霞 為家

谷のそけくはの色あきまふ  
かしてきけやりの夕夕勢

夫木 海辺霞 参議為相

くさ月の夕夕れきと波路を  
かきみを出て帰るふかひ

續古 朝霞 家隆

春の夜乃おむり月夜けき  
あつ朝月もなほくはむらん

夫木 河辺霞 成茂

水とやまの柳乃やうみどり  
うらんのもは乃あやうとく

建保哥合 野霞 順徳院

むすばやわらうまはまて秋の  
さうばそかきむ音のむらえ

遠まう海火かきむ。霞ひねや。楯

くの煙ももろぬ浦く霞ひ。関

けうらう。霞ふとを。霞とあゆ

旅人 森本の枝もつらぬ風を霞

里里の煙ももろぬ。里遠くかきむ。

我もむ里女霞 河沿のきくむ。

霞ふむ早の浪。海柳もむ。若浪

うすむ。橋霞をまもむ。霞ひかた

ゆら。霞ふかむ。霞て遠ま川沿

日長用ひすむ。霞をまもむ。ゆき

とまもろぬ。うらかりむ。くさり  
ててぬ。雨ぬらとてもろぬ。霞も  
もむ。ききくかきむ。花の枝と  
かきむ。霞社中にむひる柳。山本の  
柳もむ。海柳もむ。霞ふかむ。風  
なてつとむ。梅根の梅もむ。ま  
枝もむ。霞の中は白ふ。木目。  
松風とて。松系もむ。檜原。松系  
もむ。松系。霞ふかむ。それもむ。  
ぬ。竹の縁もむ。とまもむ。風もむ



長所霞の客。久しむ形。花のふく  
 かさじ。霞む垣根。衣霞の衣。佐保  
 娘の歌。うらみの神。旅神のうらみ  
 とけさる。古里にまじり。初方  
 うら都れ。心から。無常。孫辺。花  
 山に霞。夕のまの。戀。いれぬ。心  
 霞。うら。縁。うら。春の。枝。うら。あ  
 わらう。と。た。ら。さ。る。と。せ

○狂 九まを春の霞れあ。の目。風  
 なる。う。ま。け。あ。ら。う。あり。女風

○詩 霞と霞のう。れ。も。と。う。き。ん  
 万ふを。あ。ま。り。て。霞。う。ら。ん。法心上人

○詩 霞と霞と本朝の哥  
 詠。う。ら。霞。と。い。ち。う。う。歌。連。俳。み

詠。う。春の季。入。ふ。い。蒙。と。う  
 う。の。み。て。霞。と。詠。と。春。の。比。天  
 氣の。半。ふ。を。い。ふ。又。詩。ふ。は。ら。れ  
 霞の。朝。霞。晚。霞。の。ふ。い。本。朝。み  
 て。い。あ。さ。や。け。夕。や。け。の。事。か。て  
 今。い。ふ。か。と。この。事。か。て。い。ら。う

○霞 是ハ詩よつるのすみあり  
 本朝俗まの朝やけや

けの事。の。日。の。て。る。と。東。の。方  
 赤。し。て。さ。う。う。早。く。早。く。き。ゆ  
 雨。う。ら。ん。そ。う。一。面。ま。あ。ら。ん  
 二。三。日。の。内。は。雨。あ。ら。る。り。日

の。入。り。て。西。赤。く。南。へ。す。り。る  
 晴。あ。り。○。か。す。の。事。委  
 く。ハ。本。篇。博。物。筈。と。い。ふ。書  
 物。の。ぶ。ら。ゆ。へ。さ。る。小。畧。に

○霞五字對句 同上

霜空澄曉氣 聖藻無寒露

霞景呈芳春 仙杯落晚霞

○霞七字對句 詩礎

雲開日月臨 青瑣卷曙霞

風卷烟霞上 紫微晚霞多







佐保姫 春の造化の神也

天地の色とありきとせりみ

あづきさるかり袖下集に四季

の姫此歌あり佐保姫の言神の

に於ては代と名をきりしに

草庵 佐保姫のあらもきりし名も

ありし處ふり春のふり勢頓阿

詞春の雨ぐみの風夕暮佐保姫

の産後夜さよひの神さまを

花咲く司のさうらうさえうへ

非佐保姫の家ゆり色産後宗俊

狂三不姫の産乃夜ゆひうへ

けさゆまとうりあはれんけ 走帆

木地爐縁 数寄屋のて

冬の炉小塗あらと用ひ春の木地を

用ひ春の自然とやさうさゆつと

塗あらしそいさうり又

えさうりさなありてさう **東宮**

春どうどうもしても春の東と主

官どうゆへ季さうりいさう御即位

かき親王の御 **霞の洞** 天子の

事と申と也 御位と

とぶせぬとと仙洞と申奉るその

御事さうり季不用る霞の洞ハ仙

人の居所な色ハ目 **雙調** 春の調子

出度たへ奉るこ さう春の万

物と生むる其音ハ木音さう内裏ハ

て舞楽ある時春のさの調子なれど

**春小あひや** 雪玉集

あひやとく人を時とせり

あひや荒田のさふあひや **春**

**あひや** 伊勢物語 月やあひ

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや

あひや あひやあひや



春養生

素問曰く春三月これ養生

陳く天地共小生一萬物以て榮ふ夜一り臥し早く起き庭にのろを歩し形とゆるやかに志を生ぜ免よし生じて殺すこと久し賞して罰とつことなき是養生の道也

春天氣

春の初甲子晴まら天氣はよくは雨ふれ

春中雨多し此日なりの事はあらす春の物のころ先なれば年中の風雨もこれな准る事多し殊小甲子の干支の始まる此日の晴雨も多かつたを春の南風の雨とて春の雨の歌も詠如く云く降續くぬ之晴んとして四方は山の根雲わが立登る此時風の東も暫く又北吹上りて雨ふるは暗ると云共寒くして四五日の内まて雨あり

春草木

此の春の草木は正月の季

柳

楊柳の柳は水辺に生

柳

川を柳は青柳

柳

金絲。白綿。点花。弱州。樹

柳

風見草

柳

根水草

柳

柳の眉

柳

万葉

柳

堀川百首

柳

俊頼



文治百首

定家

遠くをたみどりけきふちりまきけ  
まんぼかこの庭乃あはれ中だ

夫木 岸柳 伊勢大輔

ま柳のやみねをふひくあひい  
こゝ遠くこもるまわいけま

夫木 杜柳 匡房卿

くこへてふみりしそふまきく  
いこよりかふるま柳のあり

建長十首 河柳 光俊

せほくまみかかこまされい玉川の  
いそい柳 えこそふうけく

建長百首 水柳柳 伴正

里をた渡の河をれうえ四ふき  
やづへまらとりかつせよこら

夫木 水辺柳 家隆

立田川せまらいあはれかあわの  
色そをうらひま乃青柳

同 開居柳 兼宗卿

我宿のりりく柳うちなびく  
とあさ乃糸いんか人りき

詞 ぶびくおとてよるう。野  
野野系柳。美奈路まよりてる。

初人もまらる。ま柳のほむた。  
河岸の柳。川そい柳。ほむた。

ぬきそを。糸の糸にまが。底る  
糸をまは。おまら。岸の柳。ゆ

とけて糸る。波ふるまを堤。堤乃  
柳。さ柳。う柳。難まが糸まび

を。糸のそい垣。かまの柳。垣振乃  
柳。庭庭柳。門の柳。た柳。田

門。回ふるびく糸。柳の糸。青柳の糸。  
棹。柳の糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。

糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。  
糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。

糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。  
糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。

糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。  
糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。

糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。  
糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。

糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。  
糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。糸。







まぬのあつたててゆく今より  
あまのつまんやせ川のせり

詞 春日野。香清の沢。淡沢小池  
内堀。系昔の人月。無ぬるも。橘芥

小芥。味根芥。差芥。沢の芥。淡の  
名流の芥。縁の男。少流。やと。芥

非 芥のつむとくせ酒ささや。其葉  
指よりかろふひまらる根芥。其葉

厚小。縁芥。梳るまぐれ。其葉  
さすひや。縁小。味根芥の花。同

女芥 芥の事なり。一説はハ  
サリの外。別。芥。名。と

又。芥のありと。説。あれとも  
七日の若菜七種。十二種ともせ

ア。い。あ。れ。も。多。く。の。名。目。か  
是。と。以。て。も。時。に。其。異。名。あり

夫。芥。の。女。芥。と。い。ふ。は。芥。の。女。芥  
と。名。將。田。の。栗。田。畔。つ。く。は。芥。の。芥

志。川。の。女。芥。山。田。の。女。芥。と。い。ふ。は。芥  
芥。の。芥。を。始。と。い。は。る。芥

薺菜 冬。至。後。菘。と。生。じ。二。三。月  
莖。と。か。こ。ん。護。生。炒。と。云

薺蒿 順。和。名。曰。あ。つ。ま。の。和。名  
か。た。ご。と。あり。夫。木

く。か。は。ま。て。あ。つ。ま。の。あ。つ。ま。の。芥  
芥。の。芥。の。芥。の。芥。の。芥。の。芥

嫁萩 薺蒿のこしつ。芥  
の。芥。の。芥。の。芥。の。芥。の。芥

正。貞。右。と。い。ふ。を。こ。れ。と。い。ふ  
と。こ。の。色。々。説。め。る。三。品。も。同。物。と。い

嫁菜 雞。見。腸。と。云。芥。の。芥  
と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ

椿 玉。椿。と。云。白。玉。椿。と。云  
海。石。榴。と。列。々。椿。と。伊。勢。椿。と

二。階。椿。等。別。種。を。数。百。種。あり  
山。茶。海。石。榴。櫻。椿。と。い。ふ

皆。は。ま。さ。と。訓。と。尚。説。多  
後。編。の。後。と

波菘菜 異。名。波。菘。赤。根。芥  
正月。搦。物。春。喰



穀精草 や艸 裁星艸三月の内田の中を生じ葉石

菅のさくく花小き丸じて白く光ありて星のおくく 木三、秋とん

秦椒の皮 △山椒皮ともかく 山椒の木のこと

雑菜摘 雑菜とむらうの季はし 摘む春と瀧の菜のこと

山葵 山中の水ちくた取ふ生じ人 家にも傳ふ三月末三月苗生じ

獨活 △葉獨活先づいといふこ 風をさふ獨活ゆふ名づく

○説より二月の季とともりもり

三葉芹 △三葉ともいふ。正月末より二月苗生じて專

喰ふ。一説より正月小ころ説もあり 又二月小ころ説もあり可考

褒美の花乃句 ちかえろ 言葉え

苔肺 △海苔ともかく。海のこといへ いろいろ種類あり次ふ記を

△青苔 菟苔ともく味ちやちや伊勢 いろいろ多く出ふもの

△神化苔 △あぬつりいも色紫あて 石の上又生じるものあり

△於期苔 海中石の上生じ其うこち いろいろあり

△浅草苔 江戸浅草あり 紀州浦多あり

△櫻苔 色白黄白櫻の花とちくちかこころ いろいろあり三月の季とともり

△松苔 大さく松花と母 雲がうり 多く出る

△熊の毛 何れもまら苔の味其角 青苔や湖まきけ松が松 又艸

△在武 武さる浅草苔の各のこころ ほかろぼの源川のりの信海

△袖 袖かきそ海士のうろや青苔や いろいろありやまんとやまら

鹿角草 鹿尾草。六味兼いといは 如く色く白く伊勢物語 業平朝臣 ありあはむびぐれおみ孫りも



初、まきのりのみ神木つくと  
能まをまひりし相ふのれじ其角

石蓴 若和布ともいふ。南海の  
石まつゆく生を色青

海雲 海蘊ともいふ。其形乱き  
くろ糸のふく諸国

より出る岸和田并對州う出るが  
より。俗あまのりてをくといふ

種植 二月の季又正月の節  
旗子紫蘇 蒸菜漆

移栽 正月移し栽ると上時  
能生活さる故かり北日過より

来月十日ころ迄の中より地氣  
ハ月不隨てこえんかり汝を見て

ちるべし氣盛んる時木の精皆  
枝葉にあり是を移し栽ると其性

を破る移し植ると土を半分  
入棒を以て土をつま堅くとぐり

上よりやりりる土を加へ地面より

二三寸高くしては土をよみまを  
高く置べくはうえて後半月を

毎日水と洒ぐべし。木を  
移し栽る時ハ東西南北の土を

木小はち置て穴をかつらうと  
くひろく堀りて根のまを

らぬやうに栽べし。大木を  
鳥居木とたてしそれ小は

つらあげてたら根の折さ  
さぬやうにとべし

春生類

春の季なれども如  
此卯の二月より用也

鶯 本朝ハ唐土ハ鶯の如  
ちらぐふくといふも梅柳も

ともあふて乃雅音いひ  
唐土の鶯ハ大日本朝の鶯を有

身はとぐれて黄色なる鳥也。黄  
鳥も黄鸝もいふ嘴と足は赤

羽は黒。又日本のうぐいすハ  
黄頭鳥ハ名付て別物也。説書







室治百首 朝鶯 為家

ゆめまど縁ぐるの竹たのむた  
かからよせやうらぶすれなく

金葉 山家鶯 攝政左大臣  
山家 とうさこの中とまきよこ  
谷乃鶯 縁そのこととわく

夫木 田家鶯 俊成  
まひとが秋のそ縁を松うね  
浦鶯 同 家隆

雪のよりふささけの歌  
うらぶるもも笑やけいさか

論 鶯 本つさふうらぶ  
来るく百さけりそく

雪のよの本ささの雪の中は  
まがてあく谷はれ古巢谷の

戸ある軒 鶯の鶯 新鶯 ぬさあ  
霞霞の中 鶯ふしよ 霞さる

朝のあのももおさうすなく  
これのあ 縁ぐるの竹の縁ぐる

垣根さなるはさ竹の縁ぐる  
の小えさふうらぶ 初音いこ

春風はぐる 鶯 春 縁ぐる  
はふる 友 友さる 友さる 梅 梅の

柳 鶯 言け鶯 有柳の月ふる  
曉ふく 鶯 花さる 鶯 鶯たる

鶯 縁ぐるの鶯 鶯の縁ぐる  
も 令衣も 縁ぐる 秋の鶯 鶯

狂 縁ぐる 鶯 鶯さる 鶯 鶯乃  
やう 鶯 鶯 鶯さる 鶯 鶯乃

梅が枝にそふる 鶯 鶯さる 鶯 鶯乃  
口 鶯 鶯さる 鶯 鶯乃

魚 戯芙蓉水 騎 擁軒 裳客  
鶯 啼楊柳風 鶯 驚翰墨林

詩 鶯 七字 對句 詩 礎

林間花 雜平陽舞 作春啼

谷裏鶯 和弄玉 蕭始藏鶯

鶯ノ声ハ弄玉ヲ蕭ニ似タリ

コソリワウクハスロウギヨクシヤウ

ハシテカラスモス



春生類 春ニ生ク 春ニ生ク鳥類

春山鶯啼修竹裏 春ニ生ク鳥類 轉黃鸝

仙家犬吠白雲間 仙ノ家ニ生ク 送好音

詩鶯詞 唐 鄭暗

欲轉聲猶欲將飛羽未調 鶯ノ聲ヲ轉スルニ似テ 高風不

借便何處得遷喬 鳥ノ居ニシテ 樹木ニウツリ

居スルコトヲ得ナントシ

詩鶯詞 鄭谷

春雲薄々日輝々宮樹煙深隔

冰飛 カスミウスクタル 景ノカ

為能歌繫仙籍麻姑乞與女真

衣 能音 ナスニ仙家ノ名籍ニ

鶯之故事 鶯ノ機 梭ハ女ノ機

のいまるはあはれと機とみり如

羌兒笛 鶯ノ聲 を羌

秦女竹笙 秦ノ女 笙

を秦王の女子弄玉とて名人

仙韶九成 鶯ノ の

金衣公子 鶯 を

稱美 詞 羽の

鳥の轉 水鳥 水鳥

百千鳥 春ハ 春ハすべての鳥



とつてとく鶯の名とかける書  
ものをどいつと覚るより一頭

昭の説るる鳥をいれ鳥或は鳥  
の千声をいひては春をいふ

◎古今百子あるる春におどた  
わりのいれも我をふりゆく

◎非河上柳梅の目刺 白魚の  
石ちりり 其角

竹の刺とて白魚の目とつてぬ  
きりりて賣る勢切り専出る

◎鵜鳥 形鳥よ大黒色声響と調ふ  
似る雄の啼と雌の雨とよふ

◎駒鳥 頭と左右ふりて形走駒の  
如く故名は春夏能啼

◎雲雀 日の晴る時高く上り  
て鳴る日晴といふ心と名

◎干鱈 たつれりて諸國と  
て京師大坂等へ春に

多く上りて故春の季とする  
◎非干てもまて鱈のまて春は東野

春の終

入用字引集 全一冊

此字引い世俗日く入用の文字  
と撰りあつめられ小用ひざる遠  
く文字とてよく板字とひくふ  
甚とてやく之真の早刻なり

須為批

官澄

平云字

ハ為偽

板也

文化元年甲子臘月發行

東都 須原屋長命

皇都 野田次長衛

浪花

同



